

道徳科学習指導案

令和 年 月 日 () 第 校時
第 学年 組 指導者 ○ ○ ○ ○

学習指導要領の内容の表記で記載する

1 主題名 <例> きまりの大切さ 【C 規則の尊重】

- 主題名は、年間指導計画をもとに記入する。
- 主題名は、シンプルで分かりやすい表現とする。
 - ・教師の思いが込められた授業のテーマであること
 - ・ねらいを凝縮したものであること
 - ・児童（生徒）にとって学びの指針であること

2 教材名 <例> 「きまりのない学校」

(出典 日本文教出版 小学校道徳「生きる力〇年」)
(出典 東京書籍 新しい道徳〇年)

- 教材名は、年間指導計画をもとに記入する。(出版元や書名、制作元を明確にする)
- 主たる教材としては、教科用図書を使用しなければならない。そのため、教材を安易に変更することは避ける。変更や修正を行う場合は、児童（生徒）の道徳性を養うという観点から考えて、より大きな期待ができるという判断を前提とし、学年やブロック等による検討を経て、校長の了解を得て行う。

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

- 学習指導要領や解説を熟読して、授業で行う内容項目を、教師自身が深く理解する。
- 授業で行う内容項目については、担当学年の内容項目だけでなく、小・中学校の内容項目を熟読し、児童（生徒）の発達段階や指導の系統性を理解する。
- 学習指導要領や解説を熟読して理解したことを、教師自身が上記の2点を踏まえて、ねらいとする価値の捉え方を分かりやすく記述する。

(2) 児童（生徒）の実態について

- ねらいとする価値に対して道徳科の時間やそれ以外の教育活動でどのような指導を行ってきたか、その結果、児童（生徒）がねらいとする道徳的価値についてどのような状態にあるのか記述する。さらに、ねらいとする価値に関する児童（生徒）の実態を把握する方法として、日常の行動における教師の見取りや主題に関する児童（生徒）へのアンケートなどが考えられる。
- 児童（生徒）のよさや可能性を把握して丁寧に記述する。
- 児童（生徒）の課題も整理し、教師の願いなどにも触れる。

(3) 教材について

- 教師が教材をどのように捉え、どのように扱うかを記述する。
- あらずじに終始することなく、一番大事にしたい場面がどこかを記述する。
- 内容や要点、登場人物の気持ち、発問への生かし方などについて記述する。

4 学校課題との関連（研究学校等においては、研究主題との関連）

本時において学校課題（研究主題）と関連がある場合は、ねらいや児童（生徒）の実態、指導過程などに応じて工夫した指導内容について記述する。

5 ねらい

- 設定に際しては、複数の道徳的価値をねらいとして構成しないように留意する。
- 文末表現については、その時間の指導の重点が道徳的判断力の側面にあるのか、道徳的心情の側面にあるのか、あるいは、道徳的態度の側面にあるのかを明確にする。

<例>自分を大切にし、規律ある行動をしようとする判断力を高める。

相手のことを思いやり、親切にしようとする心情を育てる。

生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重しようとする態度を養う。

6 人権教育の視点

本時のねらいや内容、指導方法（学習形態など）が、人権教育の「育てたい資質・能力等」とどのように関連しているかを記述する。ここでの視点が、展開の「人権教育上の配慮」において具体的な記述となる。

7 生かしたい児童（生徒）

本時の中で、特に「よさを伸ばす」「配慮を要する」などの視点から、児童（生徒）への指導・支援を記述する。

○芳賀の教育 HP 版 Q&A集 人権教育 H19「Q6 各教科等の授業において『生かしたい児童生徒』を設定する際、どのような点に留意すればよいか」参照

8 他の教育活動との関連

特に関連のある教育活動、体験活動、日常生活との関連、事前の指導や事後の指導の工夫などについて記述する。

9 展 開

4で「学校課題との関連」を記述した場合は、記入する。

□中心発問 ◎学校課題との関連 ○人権教育上の配慮

| 指導過程 | 学習活動と主な発問 | 時間 | 予想される児童(生徒)の反応 | 教師の支援 | 資料 |
|--------|--|--|----------------|-------|----|
| 導 入 | <p>「指導上の留意点」とも表記できる。</p> <p>○価値への方向付けを図る。主題に対する興味や関心を高め学習意欲を喚起、動機付けを図る。 ・児童(生徒)の心を引きつけ、話し合おうとする問題に児童(生徒)の気持ちを焦点化する。 ・絵や写真、日記、ニュース、調査結果などを基に児童(生徒)の心を揺さぶり、問題意識を掘り起こす。 ・直接、「友情」などと、扱う価値を板書して考えさせる方法もある。 <発問等の例> <ul style="list-style-type: none"> ・～したこと(できなかったこと)はありませんか。 ・～について、これまでどう考えてきましたか。 ・今日は～について話し合ってみましょう。 ・この話には○○という人が出てきます。 ・話の場所は～という所です。 ・話は～の時代で～という様子でした。 </p> | | | | |
| | 展 段 | <p>○【価値理解】教材を通して道徳的価値の理解を図る。 ・児童(生徒)が教材中の主人公に共感したり、主人公の行為を検討したりして道徳的価値を追求する。 ・自分がどんなことを考え感じているかに気付き、他の人の考え方を知ることで自分の考えをさらに深めたり変えたりするために、学級の実態や発達の段階に応じて、グループなどで話し合う時間をとることが望ましい。 ・前段の終わりに、道徳的価値の理解を図る。教材の中での主人公の思いを整理し、何が明らかになったか(大切であったか)を確かめる。ただし、道徳的価値について「考え、議論する」場合は、意見を一つにまとめる必要はなく、多面的・多角的な考えを尊重する。 <前段から後段につなげる価値理解の発問例> <ul style="list-style-type: none"> ・今日は主人公の気持ちを考えてきました。この話からどんなことを学びましたか。(どのようなことが大切だと思いましたか。) ・□□とはどういうことだと思いますか。 ・主人公の生き方から何を学びましたか。 ・主人公にどんな言葉をかけたいですか。 </p> | | | |
| 開 段 | | <p>○【自己理解】教材から離れ、自分のこととして道徳的価値を捉える。 ・話し合いが教材の世界だけで終わるのでは、児童(生徒)は主題を自己の生き方の問題として捉えることができにくくなる。そこで、この段階を置くことが広く行われている。 ・話し合ったことを生かし、主題と関連して、これまでの自分を振り返り、自己を見つめたり自己の生き方を考えたりする。 <発問の例> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの自分はどうかであったか振り返ってみましょう。 ・同じような経験はありませんか。見たことや聞いたことはありませんか。 </p> | | | |
| | 終 末 | <p>○ねらいとする道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、実現することのよさや難しさなどを確認したりする。 ・ねらいとする道徳的価値について整理し、今後の自分のことについて見通しや意欲をもてるようにする。 ・実践を図る段階ではないので、「これからどうしますか」「どうしたいですか」などの問いかけや「決意表明」を求めない。(学級活動と異なる点) ・余韻や感情の高まりを大切にする。 <終末の例> <ul style="list-style-type: none"> ・先生にも、かつてこんな経験が・・・(説話) ・授業を通して考えたこと感じたことを書きましょう。 ・先生が一人一人にお手紙を書きました。(メッセージ) ・昔から～と言われています。(格言、ことわざ) ・友だちの作文を読みます。(作文) ・音楽や動画の視聴 ・ゲストティーチャーの話 等 </p> | | | |

(聖徳大学大学院 吉本恒幸教授の「平成29年度新任道徳教育推進教師等研修会」における講話資料を参考に作成)

10 評価

○児童（生徒）と教師、両者の視点と観点を具体的に設定して記述するようにする。

(1) 評価の視点（児童・生徒の学習状況に関すること）

児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子（学びの姿）を継続的に把握すること。
一人一人の成長を認め、励ます個人内評価であること。

○一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展していたかという視点

〈例〉・道徳的価値について、一つの見方ではなく様々な角度から捉えて考えようとしている。
・自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。
・道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠や、そのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている。

○道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めていたかという視点

〈例〉・道徳的価値について、自分のこれまでの体験から感じたことを重ねて考えようとしている。
・道徳的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え考えようとしている。
・学んだ道徳的価値のよさを感じ、これからの自分の生き方に生かそうとしている。

(2) 評価の観点（教師の指導方法に関すること）

教師自らが指導を振り返り、目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるもの。

〈例〉・学習指導過程は、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、自己の生き方について考えを深められるよう適切に構成されていたか。
・指導の手立ては、ねらいに即した適切なものであったか。
・発問は指導の意図に基づいて的確になされていたか。
・発問に対する児童（生徒）の発言等の反応を、適切に指導に生かしていたか。
・自分自身との関わりで、物事を多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか。
・指導方法は、児童（生徒）の実態や発達の段階にふさわしいものであったか。
・特に配慮を要する児童（生徒）に適切に対応していたか。
※芳賀の教育Q&A集 道徳教育 H30「特別な教科 道徳」の評価を行う際の留意点について教えてほしい」参照

11 教材分析

○場面ごとに、ねらいとする価値の追求を行いながら、基本発問や中心発問を吟味、分析し、明らかにする。

（事実、主人公の気持ち、中心発問、基本発問、補助発問等を明示する。）

◇基本発問…導入、展開、終末各段階で、ねらいに迫るために不可欠な発問。

◇中心発問…授業のねらいに直接迫る発問。

（教材を通して自己を見つめさせる場面での発問。）

◇補助発問…かみくだきや問い返しなど、基本発問や中心発問を補う発問。